

## talk! talk! talk! 映画監督・四ノ宮浩さん



### 映画監督

#### 四ノ宮浩さん

フィリピンのゴミ捨て場という苛酷な環境の中にありながらも誇りを失わず、たくましく生きる住民の姿を映したドキュメンタリー映画「神の子たち」。監督の四ノ宮浩さんは映像を通して私たちに生きる意味、家族の絆などさまざまなことを考えさせてくれる。

監督はなぜこの映画を撮ったのか、そして何を伝えたかったのか。映画と同時に写真展も開催していた監督に、被写体への眼差しやドキュメンタリー映画への情熱、そしてこれからの映画作りについて、その熱い気持ちをお聞きした。

### プロフィール

1958年、宮城県仙台市出身。日本大学経済学部在学中に寺山修司氏主宰の劇団・天井桟敷に入団。その後さまざまな職業を経て1986年監督デビュー。

1995年にフィリピンのスモーカーマウンテンを舞台にした長編記録映画「忘れられた子供たち/スカベンジャー」を完成。第44回マンハイム国際映画祭ベストドキュメンタリー賞など数々の賞を受賞し、世界中で大きな反響を呼んだ。2001年5月、フィリピンのパヤタスゴミ捨て場を舞台にした「神の子たち」完成。2001年11月より劇場公開され、再び大きな話題となっている。

### ドキュメンタリー映画「神の子たち」

前作「忘れられた子供たち/スカベンジャー」の舞台にもなり、アジア最大のスラムと呼ばれてきたマニラ市郊外の巨大ゴミ捨て場「スモーカーマウンテン」が、1995年にフィリピン政府により強制撤去された。ここで資源ゴミを拾い、廃品回収業者に売ることで生計を立てていた人々はマニラから約20km離れたケソン市パヤタスゴミ捨て場に移り住むようになる。

しかし、2000年7月10日に起きたゴミ捨て場崩落事故（500世帯1000人に及ぶ犠牲者が出たといわれている）が原因で、事故発生5日後にパヤタスゴミ捨て場へのゴミの搬入が中止され、ゴミ捨て場に住む人々は生活手段を失うことになってしまった。この映画は、そうした苛酷な環境にありながらも、誇りを失わずに堂々と生きる人々の姿を克明に描いたドキュメンタリーである。

2001年11月30日まで東京都写真美術館ホールで公開され、大反響を呼ぶ。第52回ベルリン国際映画祭の正式招待作品決定に伴い、2002年2月9日(土)～24日(日)まで同ホールにて凱旋記念アンコール上映される。現在は大阪・梅田シアターにて12月21日まで絶賛上映中。こちらも2002年1月5日よりアンコール上映が決定した。また、全国各地で順次、巡回上映会を開催中。

### 地獄のような環境の中でも輝く子供たちの瞳。「この澄んだ瞳の理由を知りたい」

監督は前作「忘れられた子供たち/スカベンジャー」に引き続き、今回の「神の子たち」でもフィリピンのゴミ捨て場に生きる人々の姿を撮っていらっしゃいますが、最初にゴミ捨て場の人々に目を向けたきっかけとはなんだったのでしょうか？

最初は、ストリートチルドレンの映画を撮ろうと思って1989年にフィリピンに行ったんです。ところが、実際にストリートチルドレンに会ってみると、彼らはあまりにも「お金をくれ」と言って集まってくるんですよ。そのことに僕はすごく失望して、撮る意欲を失ってしまいました。

そんなときに、ゴミ捨て場にも子供がいるということを聞いたので、スモーカーマウンテンに行ってみたくて、それが最初にゴミ捨て場に足を踏み入れるきっかけでしたね。

実際にゴミ捨て場に行かれて初めて、そこに住む人々を撮ろうと思われたわけですね。

はい。ゴミ捨て場って、想像を絶するようなひどい環境なんです。強烈な悪臭と、八百という人が1台のトラックに群がってゴミを拾っているその姿を見て、ここは僕の想像するに、まさに地獄だな、と思いました。

でも、驚いたことにそこに居る子供たちは非常に澄んだ瞳をしているんです。そして、「お金をくれ」なんて絶対に言わないんですよ。この子供たちは地獄のような環境にいらながら、なぜこんなにも澄んだ瞳をしているんだろう？ その理由を知りたくて撮り始めたのが、前作の「忘れられた子供たち/スカベンジャー」です。

前作が公開されたのが1995年。6年たって、再びゴミ捨て場を舞台にドキュメンタリー映画を撮ろうと思われたのはなぜですか？

たまたま知り合いのカメラマンにゴミ捨て場を案内してほしいと言われ、1998年にまたフィリピンを訪れたんです。スモーカーマウンテンは1995年11月にフィリピン政府により強制撤去されていたので、そこにいた人々が移り住んでいたケソン市のパヤタスゴミ捨て場へ行きました。

そこにはやはり、澄んだ瞳を持った子供たちがたくさんいて、僕は「ああ、やっぱりいいなあ」とそのとき改めて感じましたね。取材を進めていくうちに、僕はこのゴミ捨て場にダウン症や水頭症など、障害を持った子供たちがたくさんいることに気が付きました。そして、そのとき出会ったある家族が、僕に映画を撮ることを決意させてくれたのです。

どんな家族との出会いだったのでしょうか？

生まれたばかりの水頭症の赤ちゃんのいる家族でした。実は、僕はその赤ちゃんを初めて見たとき、あまりにショックで触れることができなかったのです。しかし、その家族は常にほおずりしたり抱きしめたりして、赤ちゃんに惜しみない愛情を注いでいて、その姿を見て僕は強く心を打たれました。そして、思ったんです。家族として暮らすということは障害なんて関係ないんだな、と。

2ヶ月ほどしてもう一度訪れたとき、その赤ちゃんはすでに死んでいました。でも、僕の中でその子のことがどうしても忘れられなくて、そのとき「僕はこのゴミ捨て場で生きる障害を持った子供たちを撮らなくてはいけない」と感じたのです。

では、最初は障害を持つ子供たちを主人公にする予定だったのですか？

そうなんです。でも、障害を持つ子供たちに毎日毎日接しているうちに、僕自身、その子供たちが「障害を持っている」という感覚がなくなっていることに気が付いたんです。だんだん家族に近い気持ちになっていくと、その子の障害も1つの個性のように見えて、逆にそれがとても愛おしくなってきたりしてね。障害があるとかないとかの垣根がすっかり取れていったんです。



資源ゴミを拾うことで生計をたてている住民にとっては、1台のトラックから下ろされるゴミが命の綱となる。



小さな子供も、家族のために懸命に働いている。

むしろ、そんな境遇にもかかわらず家族が1つとなってひたむきに生きているその姿に感動して、もう障害は関係なく純粋に「家族の絆」を撮ることに決めました。だからこの映画の主人公には、障害を持つ子もいれば、持たない子もいます。

### 家族というのは、大変な状況であればあるほど絆を強めていくのかもしれない

映画がクランクインされた5日後に、大雨によってパヤタスゴミ捨て場が崩落するという悲惨な事故がありましたね。映画の中でもこの事故の痛ましい映像がありますが、この事故は監督の視点にも大きな影響を与えたのでしょうか？

もちろんです。最初はもう映画どころじゃなかったですよ、500世帯で1000人以上がゴミの山に生き埋めになっているわけです。とにかく毎日毎日通って、事故の様子を撮り続けました。この事故発生の日後に、フィリピン政府はパヤタスゴミ捨て場を閉鎖してしまったのですが、ゴミが来ないということは、ゴミを持って生活の糧にしている彼らにとっては死活問題です。これは大変なことになった、と思いました。こんな極限の状況になってしまったからには、ひょっとすると暴動や殺し合いが起こるのではないだろうか、と。

しかし、彼らは違った。みんな絶体絶命ともいえる状況の中で、一生懸命胸を張って、誇りを持って生きていてね。僕はそんな姿を毎日追いかけて、撮り続けたのです。

撮影を通して、どのようなことをお感じになりましたか？

人間っていうのは、もう後ろがない断崖絶壁の状況になり「死」というものを意識すると、前向きに生きるのかもしれない。そして、家族というのは大変な状況であればあるほど絆を強めていくのかもしれない、と強く思いましたね。それが僕自身が感じたことでもあるし、映画を通して伝えたかったことでもあります。

映画の中でも出てきましたが、ニーニヤというたった12歳の少女が「泥棒するくらいだったら飢え死にする方がいい」と言うんです。あの子の口からなぜあんな言葉が出てきたのか、僕はいまだにわかりません。でも、あの子がそう言うてくれたことで僕はいろんなことを考えさせてもらいましたね。そういう部分も含めて、たくさんの人にこの映画を観て、いろんなことを感じてほしいです。

ゴミ捨て場の人々の家族と、私たち日本の家族のありかたにはどんな違いがありましたか？

パヤタスゴミ捨て場の家族はとても狭い家に家族全員で暮らしているので、自分と家族との距離感が非常に近いんです。だから、家族のことを自分のことのように考えていますね。

たとえば、子供に「幸せって何？」と聞くと、「家族が1日3回ご飯を食べることができて、いつも一緒にいられること」と答えるんですよ。毎日の食事に困る生活をしているし、当然将来への夢もあまり持てません。ですから、そういった幸福感ということ、恵まれた環境で生活している日本の子供とは違いますよね。どちらがいいとは言えませんが、家族のことを自分のことのように思いやる気持ちというのは、絶対に忘れてはならないことだと思えますね。



この映画の主人公の1人、ニーニヤ。彼女のまっすぐな瞳とひたむきな姿が、観る人の心を打つ



小さな子供も、家族のために懸命に働いている。



紙、プラスチック、空き缶などを廃品回収業者に売ることで1日平均200ペソ（約600円）の収入を得ることができる。

「神の子たち」というタイトルは、どんな思いをこめて付けられたのでしょうか？

フィリピンでは、先天性障害を持って生まれた子供のことを「神の子」と呼びます。でも、僕が付けたのはその意味ではありません。

今回の撮影中、最初の崩落事故をはじめ、僕は本当に多くの生と死に直面し、人間の生と死について深く考えました。彼らの死は、誰の罪でもないじゃないですか。ひょっとすると世の中のたくさんの人々の犠牲を受けて死んでいっているかもしれない。命を失っていく子供たちを見るうちに、僕の中で「みんな神のもとに戻っていくんだ」という意識が強く生まれてきたんです。そして、また神の子としてこちらに戻ってきてほしい。そういう気持ちをこめて、「神の子たち」というタイトルを付けました。

### 自分自身の人生のテーマ その答えを探すために映画を撮り続ける

こういった苛酷な状況で生きる人々のドキュメンタリーを撮るということは、被写体との距離が非常に難しいのではないかと思います...

たしかに、撮影していくうちに彼らとの関係は近づいてはいきます。でも近づきすぎて家族の一線まで入り込むと、同情が入ってしまいドキュメンタリーは撮れません。しかし真実を撮影するには彼らとの信頼関係も必要ですから、この境界線は本当に微妙ですよ。

今回はとくに、生と死が深く関わっていましたから難しい部分はありました。距離感としては家族と隣人の中間くらいの位置を保って撮影するように心がけましたね。そして彼らがこちらに歩み寄ってきたら少し引く、逆に離れていったらこちらは少し突っ込む、といったスタンスで撮っていました。そういうふうにならないと撮れない部分はありますね、ドキュメンタリーというのは。

あえてドキュメンタリーという方法で映画を撮られている理由はなんですか？

それは、僕がなぜ映画を撮るのか、ということにもつながってきますね。僕は、自分の生き方でわからないことの答えを見つけるために映画を撮っています。

前は、「個人が幸せになるには、どういう生き方をすればいいのか？」ということテーマに映画を撮りました。当時僕はまだ独身で、個人の生き方というものにとっても興味があったんです。今回は、僕も結婚して自分の家族を持ったこともあり、「家族とはどんな生き方をすれば幸せになれるのか？」という、やはり僕の人生における個人的なテーマに基づいて家族の絆を追求していったんです。

つまり監督の生きるうえでのテーマが、映画のテーマとなっているわけですね。

そうです。その答えを探すために、僕はドキュメンタリーを撮っているのです。そのテーマがなくなれば、結果のわかっているドラマを撮ればいいと思いますけど。

次なるテーマはなんですか？

9月11日のテロ事件以降、僕はずっと「平和」ということを意識しています。

個人の幸せ、家族の幸せについて撮り終えた今、今度は他人が、つまり世界が



どんなに苦しくとも誇り高く、支え合って生きるニーニヤ一家。



上映後、観客の求めに応じてサインをする四ノ宮監督。観客からはたくさんの質問がとび、

平和になるためには一体どんな生き方をすればいいのか？ そのためには自分の幸せはどこまで削ったらいいいのか？ あのテロ事件の日から、そのことが常に心に引っ掛かっています。だから次はきっとそういうテーマの映画になるでしょう。ドキュメンタリー映画を撮ることでのいろいろな体験をして、その答えを見つけたいですね。

この映画がいかに強いメッセージを伝えて  
いるかがわかる。  
ドキュメンタリー映画を撮ることでのいろいろな

#### 人間の「美しさ」の瞬間を映し出す。それが僕の仕事です

「神の子たち」は映画上映に伴い写真展も開催されていましたが、写真は監督ご自身がお撮りになったものですか？

はい、そうです。でも写真は本当に素人なんです。ちゃんと習ったわけではないので、自己流ですね。

写真で撮りたいものと、映画で撮りたいものというのでは違うのでしょうか？

違いますね。僕は写真を撮るとき、目に留まったものをどんどん撮っていくという感じなんです。もう本当に瞬間瞬間のひらめきですね。「これだ！」という勘だけを頼りにシャッターを押しています。

写真の撮影は、映画の撮影と並行して行われているのですか？

いえ、写真は最初のロケハンのときに集中して撮っています。映画の撮影が始まると時間的にも精神的にも余裕がなくなってしまうので、写真はほとんど撮らないですね。

撮影されるときに何か気をつけていらっしゃることはありますか？

必ず連写で撮るようにしていますね。仕上がりが全てですからね。連写で撮ると構図も少しずつ変わってくるので、そのなかから一番いいものをいつも選ぶようにしてるんです。

監督がお撮りになった写真は、やはり子供たちなど人間を被写体しているものが多いですね。

その場のひらめきで撮っているのとくに意識しているつもりはないけれど、結果的には人間が多くなってきましたね。

ひたむきに働く子供たちの姿や、彼らがふと見せる笑顔。そういった素晴らしい心を持っている人々の姿に自然と惹きつけられ、気が付いたらシャッターを押しているんだと思います。

これからどんな写真を撮っていききたいですか？

うーん、いろいろ撮ってみたいですが、でもやっぱり人間ですね。映画にしても写真にしても、姿、形だけでなく、心の美しさも撮り続けることが自分の仕事だと思っていますから。

人間の美しさの瞬間、瞬間を撮る。これからも僕はその姿勢を貫いていくつもりです。



勤でシャッターを押すという監督の写真には子供の姿が多く見られる。



ゴミ捨て場の住民の姿は私たちに生きることの美しさを教えてくれる。



「多くの人にこの映画を観てもらうことで、ゴミ捨て場の子供たちの環境を少しでも良くしたい」それが監督の切なる願いである。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.